

研究ノート

市民主体の地域啓発活動の検証

小西加保留¹⁾, 脊戸 京子²⁾, 高田 雅章²⁾, 梶原 秀晃³⁾

¹⁾ 関西学院大学人間福祉学部, ²⁾ 社会福祉法人つばき会, ³⁾ 大阪市淀川区保健福祉センター

目的: HIV/AIDS に関する啓発活動はこれまでさまざまな形で展開されているが, HIV に関わる活動に特化していない市民や他の専門職団体が, 自ら主体的に取組みを行う例はほとんど報告されていない。本稿では, 大阪府門真市にある社会福祉法人つばき会地域生活支援センター「あん」, 「門真市子どもを守る市民の会」NPO 法人「にじ」を中心に行っている市民主体の地域啓発活動を Empowerment Evaluation (EE) の手法を用いて検証する。

方法: EE は人々の「エンパワメント」や社会変革を目的にしている点に特徴があり, 対話型プロセスが中心をなしている。そのプロセスは, ①ミッションの確立, ②テイキング・ストック, ③将来のための計画の3つのステップで構成される。本活動の EE のプロセスを整理するとともに, 活動の目標となった, アウトプットとしての高校生主体のイベントを「学校を超えた地域のものとして展開する」ことと, 「性や思春期の発達課題に取り組む」ことに照らして, 6年にわたる経過を検証する。

結果: ①EEの方法の導入, ②EEを導入する組織の枠組み, ③3団体にとってのプロセスと成果の意味, ④プロセスにおけるファシリテートの課題, ⑤EEの10原則に照らして, ⑥HIV/AIDS 領域の抱える重層的課題と困難性, ⑦EEの手法自体における課題と本活動の7つの観点から考察した。たしかな成果が見られた一方で, 多くの課題も示された。今後事例を積み重ね, EE手法の洗練により活動内容が社会的貢献に繋がることが期待される。

キーワード: 市民主体の活動, 地域啓発, エンパワメントエヴァルエーション

日本エイズ学会誌 17: 159-166, 2015

1. 背景と目的

HIV/AIDS に関する啓発活動はこれまでさまざまな形で展開されている。1994年以降増加した HIV 陽性や同性愛者当事者によるサポートグループや, 当事者らに専門職を加えた NPO 法人, HIV に関わる市民団体, 専門職団体, 行政や研究者がリードする啓発活動, また高校生や大学生による HIV 啓発活動等が数多く報告されている。

しかしながら HIV に関わる活動に特化していない市民や他の専門職団体が, 自らその必要性を認識し, 地域を巻き込む取組みを主体的に行う例は筆者の知る限りではほとんど報告されていないように思われる。

本稿は, 大阪府門真市にある精神障害者の支援を日常的に行っている社会福祉法人つばき会地域生活支援センターあん(以下「つばき会」とする)が, そこに持ち込まれた HIV 感染症に関する相談を契機に, 同じく地域で子どもや障害者などを対象に広く社会福祉活動を展開している NPO 法人「にじ」, また中学校や高校の教員をメンバーの中心とする「門真市子どもを守る市民の会」(以下「守る会」とする)に働きかけ, 地域を巻き込んで行った啓発活

動について検証したものである。

HIV 感染症において, 予防とケアは一体になってこそ効果があるという考え方は, HIV 医療従事者や関係者の間ではかなり共通認識になってきている。こうした認識は, 実は HIV 感染症に限ったことではない。このたびの「つばき会」を中心とした市民主体の啓発活動は, まさにそのことへの気づきとそれを具体化するための活動といえる。「つばき会」は, 日頃から精神障害を抱える人々を地域で支えることを仕事としている。人は生きて以上, どのようなきっかけで身体的・精神的な病にかかわるかわからないにもかかわらず, 特に難病や精神的な病いの場合, いったん病名が伝えられると, 周りも自分もその病を抱える者としてレッテルを貼ってしまい, より生きづらくなる。反対に病いのことを知り, 他人ごとではなく, その周辺に起きていること, 取り巻く環境を含めてまるごと知ろうとしたとき, そこにケアと予防の一体化の意識が生まれ, 対等な人間としての対峙が可能となる。門真発の「予防とケア」の接近が, 地域の一人ひとりの意識の中にわがこととして少しでも溶け込むことによって, さまざまな生きづらさや病を抱えている人とともに, より生きやすく, 優しい繋がりのある地域を創生できるのではないだろうか。

本稿は, このような思いをベースにスタートした門真市

著者連絡先: 小西加保留 (〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町 1-155 関西学院大学人間福祉学部)

2014 年 10 月 30 日受付; 2015 年 4 月 27 日受理

における啓発活動について、Empowerment Evaluation（以下 EE）の手法を用いて分析、考察することを目的とする。

2. 方 法

初めに EE の手法を概説する。次に 3 団体を軸にした啓発活動の経過を EE の手法を用いて評価する。EE のプロセスに沿った議論は 12 回にわたって行われ、手順に沿って、自らが設定したミッションを基に、現状把握を経て、将来のための計画として、目標、戦略、戦術、指標について整理した。活動のアウトプットとして位置づけられる高校生を主体とするイベント「エイズを知ろう 1・2・3～知って・ケアして・予防して～」は、2009 年度から 2013 年度まで 5 回開催した。それらの経過を含めて、啓発活動の効果と課題について検証する。

3. Empowerment Evaluation (EE) の概要

3-1. 背景と定義

EE は、スタンフォード大学（当時）の D. Fetterman によって提唱された評価方法であり、「進歩と自己決定を促すために、評価の概念・手法、成果を利用すること」と定義されている¹⁾。EE が、1990 年代前半にアメリカ評価学会において紹介されるまでの、評価手法の歴史的変遷は以下の 3 点にまとめられる²⁾。

- ① 評価における学問的な正確さから有効性へ
- ② 評価者は客観的に評価する立場から、評価される側と共に参加する立場へ
- ③ 評価結果の評価された側への限定的な開示からすべての内容の公表へ

EE は、理論的、方法論的ベースとして、参加型評価 (Participatory Evaluation) や協働型評価 (Collaborative Evaluation) などの既存の評価理論の影響を受けているが、EE を特徴づけるものは、人々の「エンパワメント」や社会変革を目的にしている点とされる³⁾。従来の評価の仕方と決定的に異なる点を Fetterman は、「EE は、評価される側が自分を成長させる手段を自分たちの中に作っていくこと、自分を正しく見極めて、自分の行くべき方向を自分で定めていく力を自分たちの中に養うことを目指している。」²⁾と述べており、対話型のプロセスがその中心をなしている。

3-2. 原 則

EE における評価者の役割や活動は、以下の 10 原則を基本とする²⁾。

- ① 改善 (Improvement)：評価の対象となるプログラムの改善をすべての活動の目的とする。
- ② 当事者主義 (Community Ownership)：プログラムの当事者が EE 評価者の助けを借りて自ら評価を行い、その意思決定の責任を負うように促す。

- ③ インクルージョン (Inclusion)：できるだけ多くのさまざまなレベルの関係者（利用者、スタッフ、出資者等）が計画や意思決定などの評価プロセスに参加することを促す。
- ④ 民主的参加 (Democratic Participation)：適切な情報や条件が整っていれば、当事者は賢明な判断をするという前提に基づき、評価プロセスにおいて参加者の意思を尊重するよう促す。
- ⑤ 社会的公正 (Social Justice)：評価を行うことによって、社会的な不公正を是正・削減し、ひいてはより大きな社会善に貢献することを目指す。
- ⑥ 当事者の知 (Community Knowledge)：プログラムの当事者こそが当該プログラムの固有の状況や問題を理解しているという認識に基づき、当事者たちの知識や情報を重視する。
- ⑦ 実証的戦略 (Evidence-Based Strategy)：先行研究や先行事例からその効果が科学的に実証されているモデル（戦略）の活用を促す。
- ⑧ 能力構築 (Capacity Building)：評価プロセスを通して、当事者が自分たちのプログラムを評価する能力を身につけ（評価能力）、同時にプログラムを計画することや実施することを向上させる（プログラム能力）ように促す。
- ⑨ 組織内定着 (Organizational Learning)：評価プロセスを通して、プログラムや組織がその内部に「学習文化」を構築し、EE の適切さが増すように促す。
- ⑩ 説明責任 (Accountability)：出資者、研究者/評価者、実践者は相互にプログラムの過程と結果に対して説明責任を果たすように促す。

3-3. EE の実施方法

EE の実施方法は、1. ミッションの確立、2. テイキング・ストック（現状把握もしくはベースライン作り）、3. 将来のための計画の 3 つのステップで構成される^{1,4)}。

まず 1 のミッションは、これから自分たちが何をしたいのか、何を目標しているのかに焦点を当てる。このとき、グループとしての価値観や目的を共有することを目指して、少数派の意見も反映させ、参加者全員の意見を聞くこと、一人ひとりが合意形成した方向性に意味を見出すようにすることが重要となる。2 のテイキング・ストック（ベースライン作り）では、自分たちの持っているものの確認をする作業として、思いつく限りの自分たちの活動内容をリストアップする。次に 1 人 5 つのシールを自分が重要だと思うものに好きなだけ貼ることにより、一人ひとりが自分たちの活動のなかで全体的には何が重要だと認識されているのかを可視化する。次に、シールの数の多い上位 10 個の項目（活動）について、各参加者が「とてもよくできてい

る：10」から「全くできていない：1」までの得点をつけ、それをエクセルで示すことによって、それぞれの点数と、各参加者ならびに項目別の平均点と全体との比較ができるようにする。このデータをもとに参加者で議論をする。特に大きな点数の違いがあるところは、なぜそのような違いが生まれたのかを問ひかけ、さまざまな意見を表明してもらうことが重要である。3の将来に向けた計画では、これまでと同じ原則に則り、目標を設定してそのための戦略や戦術、指標を考える。そして今いるところ（ベースライン）から、目標に向かって作業していく際に、自分たちが設定した目標に向かって進捗状況をモニタリングしながら進めていく。

全体のプロセスを通してEEを押しすすめる主体は参加者である。ファシリテーターは、すべての参加者が対等な立場でエンパワメントされるように、トレーニングの役割を持つとされている⁴⁾。なお、本活動におけるファシリテーターは、研究者である筆者と、地域福祉学を教育のバックグラウンドに持つ現公務員の2人であった。

4. EEを活用した市民主体の啓発活動の検証

4-1. 本活動の背景

拠点となった大阪府門真市は、人口約12万7千人の大阪市の北東に位置する衛星都市である。生活保護率、離婚率、母子世帯率などが高く、低所得、高齢、障がいなどの生活基盤の弱い世帯が多い地域である。この地域で「つばき会」が生活支援をする中で、2007年にHIV感染症に関する相談が舞い込んだことが問題意識の始まりであった。相談を受けたメンバー達は、当時HIV感染症に関する知識がまったくない状態であり、施設長から研究者に相談があったことに端を発し、まずは勉強会を行うところからスタートした。この勉強会を通してHIV感染症への理解の輪を広げたいと考えたのが本活動のスタートであった。そしてそこに「つばき会」が日常から関わっている精神障害者への支援において感じていた、地域に届きにくい理解に繋げていきたいという思いが重なったといえる。

その後の研究としての取組み方を検討した結果、門真市が抱える課題を踏まえて、勉強会に参加した3団体と行政の保健師を加えたメンバーにより、EEの手法を取り入れることを決定した。以下、EEの手順に沿った経過について概説する。

4-2. EEの経過

① ミッションの確立（2010年5月30日）

研究に至る経過、個々の地域の課題に対する問題意識を踏まえて、目指したいことをまずはざっくりと意見を出してもらい、ホワイトボードに書いて比較しながら、皆で一つにまとめる作業を行った。その結果、以下のような

ミッションが導き出された。

「三つの団体と行政が、共にその専門性と違いを最大限に活かし、分かりやすさと素人感覚を大事にしながら、地域を創っていくことに力を合わせて、支援者も地域の皆も幸せになること」

② 現状としての活動内容の確認（テイキング・ストック）（2010年8月21日）

現時点で行っている活動、できそうな活動の洗い出しを行った結果、以下の13項目が提示された。

・情報・資金・活動場所・調査/聴取・フィードバック・事務/運営・広報・継続性のある繋がり・専門職同士のネットワーク・人とのつながり・フリートーク・仕掛け・当事者性を大切にする。

③ 抽出された活動内容に対するランキング（2010年8月21日）

上記の13項目に対して、3団体各2名ずつ、および保健師1名の計7名に、それぞれ5つのシールを渡し、重要と思うものに貼ってもらった。なお、シールは、各人の重要度の認識に応じて一項目に複数のシールを貼ることも可能である（表1）。

④ 選択した活動項目に対する各人による達成度のスケールリング（2010年11月7日）

上記③の13項目のうち、上位5位までの活動を取り上げ、それぞれ現在どこまで達成できているかを各自1～10で点数をつけた（表2）。

AとB、CとD、EとFは、同じ団体に所属するメンバーであり、平均点がほぼ同数という結果になった。同じ団体内でもメンバーによって差がある項目については、同じ事象をどのように見ているか、意見交換を行った。またランキングの基準は、人によりさまざまであったが、それらを互いに表現し、共有した。それによって声の大きい人や立

表1 活動内容のランキング

1位	人とのつながり	9点
2位	資金	7点
3位	専門職同士のネットワーク	6点
4位	調査・聴取	6点
5位	当事者性を大事にする	5点
6位	事務・運営	3点
6位	仕掛け	3点
8位	情報	2点
8位	継続性のあるネットワーク	2点
10位	広報	1点
10位	活動場所	1点
12位	フリートーク	0点
12位	フィードバック	0点

表 2 活動の達成度のスケーリング

	A	B	C	D	E	F	G	平均
人とのつながり	8	8	4	8	5	4	9	6.6
資金	2	1	6	7	5	6	2	4.1
専門職ネットワーク	7	8	8	2	3	6	8	6.0
調査・聴取	4	5	3	2	1	2	8	3.6
当事者性	10	10	7	8	5	1	9	7.1
平均	6.2	6.4	5.6	5.4	3.8	3.8	7.2	5.5

場に引っ張られるということなく、数字を見ながら、自分の考えていることもさらに深めながら、平等に話し合いができ、コミュニケーションが促進された。

⑤ 将来に向けた計画（2010年12月23日）

上記の⑤の結果から、どの項目に焦点づけて今後の取り組みを検討するかを議論した結果、最も点数の低かった「調査・聴取」を取り上げて、今後の目標、戦略、指標に関してディスカッションを行うことになった。その結果、門真市の生活保護率、若年出生率の高さなどの背景を受けて、ターゲットを子ども、若者を中心として、1. 実態を把握すること、2. 潜在的なニーズを明らかにすること、を目標にしたいとの意見に集約された。

⑥ 戦略・指標～HIV/AIDS・中高生のころに関するアンケート調査に向けた先行研究レビュー（2011年3月6日）

門真市の中学生・高校生ら思春期の学生のころ・性の悩みに関するニーズを把握することを目的に、アンケート調査を行ってみたいというアイデアが持ち上がった。そのために、事前作業として、参加メンバーが「HIV/AIDS」、「思春期」、「養護教諭」などをキーワードに先行研究のレビューを各自行うこととなった。

⑦ 先行研究レビュー報告会（2011年6月5日）

先行研究のレビュー結果を持ち寄り、その内容の報告を行った。その結果、「性」の問題と「生」の問題が密接に関連していることなどの気づきを得た一方で、具体的にどんなアンケート調査を行えばいいのかという方向性をメンバー間で見出すことが困難となった。

⑧ 第2段階へ立ち返り、活動内容を振り返る作業（2011年8月6日）

そこでテイキング・ストックで掲げた活動内容のうち、どのような経緯で「調査・聴取」に焦点化を行ったのか、メンバー全員で改めてわれわれの市民活動の原点を振り返ることとなった。その結果、当初掲げた「調査・聴取」のみを活動内容に掲げるのではなく、「人とのつながり」、「専門職とのネットワーク」、「当事者性」に関わる活動を通じて可能となるのではないかという洞察を得、各団体の共通

認識として確認された。

⑨ 将来の計画・戦略の練り直し（2011年11月23日・12月23日、2012年1月9日）

以上を踏まえて、では「何を」、「どのようにしていくか」という将来の計画・戦略につき話し合った。そこでは参加者のそれぞれの考えをポストイットに一項目ずつ書いて可能な限り多く提示し合う形でのブレインストーミング法を用いた。これらの話し合いの結果を研究者がまとめたのが、表3である。

結果的に活動の目標は大きく二つに分かれた。一つは、高校生主体のイベント開催について、目標を「イベントを学校を超えた地域のもので展開する」とし、戦略、戦術、指標をそれぞれ表のように整理した。イベント自体はそのタイトルに示すように、高校生らが自分達に馴染みやすい方法で、まずエイズを知ることから始め、ケアに思いを馳せ、自分事として予防を考えるという3つのステップを経て、HIV感染症への理解を深めることを目的とした。これまで5回のイベントを実施し、実際に赤で示したところが達成しつつあると評された。高校生の企画をイベントに組み込み、従来の実行委員は裏方に徹してイベントを支える側に回ることを、教育委員会を通して成人式の参加者にチラシを配布することなどが達成され、目指していた形に近づきつつあることが分かった。またアンケートの自由記載では、自治会やPTA etc. …にも来てほしい、大人に対しても自治会などを通して周知してほしい、中学・高校巡りができたらいい等といった声が聞かれた。また5回目のイベントの振り返り会では、学生から地域の生徒会交流会において複数の高校が協働して開催したいという希望があることが述べられた。さらに当該高校の演劇部が、その後の文化祭において、母親がHIV陽性であることが「いじめ」の背景になっているという想定に基づく1時間程度の脚本を作成し、150人もの観客を動員したとの報告を受けることもできた。なお、5回のイベント開催に際しては、高校生を中心とした実行委員会や打ち合わせを毎年7回から10回以上開催しており、年を追って高校生の主体性が高まったといえる。

達課題の問題と繋がっていくとの認識に至ることを目指すとの考えに至った。たとえば、子育てにおける虐待防止に向けた親支援は親子関係の改善に繋がり、ひいては性と向き合う子の発達課題にも影響するという認識である。そして2014年6月の総会において、「児童虐待防止のための親支援」に関する講演・ワークショップを行った。しかし、結果的には、若い保護者の出席は少なく、より身近なテーマの提示の仕方等の戦術が必要であることが分かる結果となった。

筆者が D. Fetterman を招いて行った研修会で EE を学ん

だのは2004年のことであった。当時は自らの活動を自ら検証するEEの方法は魅力的ではあっても、数字にして可視化するという方法は日本に馴染むのか、いささか半信半疑の印象を持っていた。しかしその後、政策におけるプログラム評価の義務付けやITの進化等を背景に、数字に対するイメージが変化していくなかで、HIV診療にかかる環境に対する患者による検証⁵⁾や、ケアマネジャーの研修体制に関する検討⁶⁾等に応用してみた結果、どの領域でも使用可能であり、特に後者においては、参加者の間のディスカッションが毎回盛り上がりを見せ、非常に満足度が高いように感じられた。

今回の活動へのEEの導入については、特に当初その方法にかかるプロセスの説明に時間を要した。実際のイメージが掴みにくく、「やってみないと分からない」印象が強かったが、結局、EEの中心となるコンセプトであるコミュニケーションを深めるための一つの方法ということで納得を得てスタートすることができた。

② EEを導入する組織の枠組みについて

啓発活動の契機は、先に述べたとおりであるが、「つばき会」にHIV感染症に関する相談が舞い込んだことを機に、精神障害者への支援において感じていた思いと重ねることからスタートしている。その後、HIVの勉強会に参加した3団体と行政の保健師を加えたメンバーにより、地域の福祉的課題への取組みにEEの手法を取り入れることを決定した。しかしながらミッションを非常に大きく捉えすぎたこと、ファシリテーター（評価者）が3団体の参加の経過については聴取に努めたものの結果的には十分理解できていないままにスタートさせていたために、共同で設定したミッションをそれぞれに目標を持つ3団体が推進させることの難しさにつながったことは否定できない。EEはより明確な構成の枠組みの中での、多様なスタッフ、利害関係者の集まりに適した方法と考えるのが妥当といえる。

③ 3団体にとってのプロセスと成果の意味

EEでは、参加者自身のエンパワメントを目指すことから、その主体は参加者である。そしてファシリテーターは、参加者に対してトレーニングの役割を持つとされている³⁾。ファシリテーターの役割の検証については後述するが、3団体と行政を含む参加者がEEの手法にも不慣れななかで、評価者に依存しない主体性を醸成することは簡単なことではなく、将来の計画については、自由な議論を経て評価者が整理をすることになった。

しかしながら、「守る会」のメンバーの教員が属する高校の部活の発表の場としてイベントが活用され、学生達の自発性や主体性を大きく育て、HIVへの理解をその内面に取り込むことができるようになったことは、よい循環を産む成果に繋がったと考えられる。

また、今回の経験からEEの手法に関心を持ったNPO法人「にじ」の職員が、本務である児童養護施設において、EEを使った業務改善に取り組み、生活棟グループ別によるEEの実践を経て、リーダー研修へ応用するなど組織的な活動に繋がってきていることが報告されている。

さらに「つばき会」では、これまでの大人の精神障害者を対象にしたケアにかかわる事業から、若者の居場所作りを有限会社として新たに企画し、さまざまな背景により精神的な課題を抱える若者らの病気や問題となる行動等の予防に向けた活動へと展開する準備を始めている。そしてそこに本活動に関連した学生や「守る会」のメンバーらの協力を仰ぐことを予定している。このことは、EEによる二つ目の目標である「性や思春期の発達課題に取り組む」ことに繋がる企画であるに違いない。

また今後「守る会」自体においては、組織内において、若いメンバーらと共にEEの取組みを継続できれば、さらにその成果が期待できると考えられる。

④ プロセスにおけるファシリテートの課題

EEの活動の中で、ファシリテーターの役割はたいへん重要である。すべての参加者が対等な立場で意見を述べ合うことができるような工夫やグループダイナミズムを生み出すスキルが必要とされ³⁾、エンパワーにネガティブに働くコンフリクトや誤解等を解消するための助言やヒントを適宜与えると同時に、参加者の能力を高めて、参加者の依存に注意を払うべきとされている。一方で当該課題のアドボケイトの役割を担うともされており、そのあたりの立ち居振る舞いや距離感はたいへん微妙である。本活動においては、ミッション作りから、活動項目に対するスケーリングに基づくディスカッションまでは和気あいあいとした雰囲気中で「精神の解放」³⁾がなされたと評することも可能である。しかしながら、ファシリテーターにとって、最も困難な局面は、将来に向けた計画において、最も点数の低かった「調査・聴取」を取り上げ、実態の把握や潜在的なニーズを明らかにすることを目標にした後であった。先行研究のレビュー結果を持ち寄り、議論したが、具体的にどんなアンケート調査を行えばいいのかという方向性をメンバー間で見出すことが困難となった。その後、第2段階へ立ち返り、一定の洞察を得、共通認識が確認されたが、この間の展開に難しさを感じた。EE原則である実証的戦略を研究者であるファシリテーターが意識しすぎた側面があったことは否めない。課題のアドボケイトとして、門真の地域に関する行政データを共有する等を通して、より今後の方向性を参加者自身が見出す方向をリードする必要があると考えた。

⑤ EEの10原則に照らして

EEの基本原則に照らして今回の経過を検証すると、イ

ベントに関わる目標は、プログラム内容の進展や高校生の主体性の伸長といった点から見たとき、インクルージョン、民主的参加、改善、当事者主体、当事者の知、能力構築に関しては、一定の成果があったと評されよう。しかしながら、実証的戦略、社会的公正さ、組織内定着、説明責任の原則に到達するには今一步課題があったといえる。そこには今後の展開に期待される部分と、一方にはファシリテートの課題が背景にあると評することができる。

⑥ HIV/AIDS 領域の抱える重層的課題と困難性

HIV/AIDS における啓発の目標は、心の深層に触れる部分から、対人、対組織、また対制度・政策等多岐にわたる。こうした複雑さが、EE を展開していく上での困難性にも繋がる場合がある。今回は特に EE に参加したメンバーが年齢的にも構成上でも多様であったことが、その複雑性を増したとも考えられる。たとえば「守る会」のメンバーは、子育て支援を理念としているが、親の働き方やコミュニケーション形態の変化などを背景に若い人の参加が少なく、年齢が高い傾向にある。高い年齢層にとって、HIV 感染症は教育において触れる機会もなく自らの課題として直接的な接点を見出しにくい。一方、若者にとっては恋愛は大きな関心事であり、性に関わる知識への関心は非常に高く、セクシュアリティや HIV 感染の課題を、自律した個人としての日常的な人との繋がりや延長線上として実感し考えを深める機会となりやすい。他方で、「つばき会」は日常的に支援を行っている精神障害者と HIV 陽性者への理解の道筋における共通点と相違点を探っていた。さらに「つばき会」は実質的にイベントの事務局の役割を担っていたため、HIV 関連行事の学校関係への広報に際し、まず教育委員会や行政の了解を得ることが大前提となるなかで多大なエネルギーを費やさざるを得なかった。このように、HIV 感染症への向き合い方はそれぞれの団体によってさまざまな温度差が存在した。

当初ミッションを設定した際は、あくまで3団体による当事者主体原則に基づいて行われたため、その雰囲気はたいへん友好的で結果についても皆の合意を得られるものであった。しかしながら門真市全体の課題を包括的に捉えようとしたその内容は、明らかに非常に広範囲なものではあった。経過に応じたミッションの見直しは EE のプロセスにおいて推奨されているが、実際には時間的制限もあり遡るにはかなりの労力が必要となる。そのため本活動において見直しをするには至らなかった。にもかかわらず、結果からみて改めてミッションの内容に立ち返ったとき、一定の成果が出せたと評価しうると考えている。しかしながら、EE の原則である組織内定着や実証的戦略に至るような有効な展開をするためには、当初から構成員や枠組みについて、より慎重に焦点づけて検討される必要があるであ

ろう。また本活動の第2ステップとして、各団体の中でそれぞれに EE の試みがなされるならば、よりその方向が明確となり、活動に深みを見せるのではと考えられる。さらにはこうした活動だけで目標が達成されるものではなく、予算、人事などを含む、さまざまな仕組みとの連携が必要であることにも留意する必要があるといえる⁴⁾。

⑦ EE の手法自体における課題と本活動について

EE はそれが行われるプログラム・組織のさまざまな状況に応じてさまざまなアプローチをとりうるとされる。また10原則のうちのどの原則が重視されているかによって、差異が生じるともいわれるが、実際にはどのような方法で EE を行うのがその状況に最適かはいまだ十分理解されていないことが課題でもある。先行事例では、エンパワメント実践における性質や因果関係を理解するために必要な分析はまだ十分なされておらず、より明確な EE の質にかかわる議論を組み立てるためには、質的・量的、また両者をミックスした調査方法により、信頼性のある事例分析を行う必要があるといわれている²⁾。

本稿の EE による啓発活動の分析からは、多くの課題が示されたが、他方で確かな成果が見られたのも事実である。こうした事例を日本において積み重ね、分析、検証を継続することが今後の EE 手法の洗練と、何よりそれを使った活動が社会的貢献に繋がることが期待される。

謝辞

本研究は、厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業『HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究班』（研究代表者 白阪琢磨、研究分担者 小西加保留）の成果の一部によるものである。

研究協力者は、脊戸京子・高田雅章（社会福祉法人つばき会地域生活支援センターあん）、戸田伸夫・小川佳子・入江宏（門真市子どもを守る市民の会）、下笠幸信（NPO 法人にじ）、梶原秀晃（大阪市淀川区保健福祉センター）、なみはや高校の学生の皆様他、大阪府守口保健所各団体にご所属の皆様である。ここに記して深く感謝申し上げる。

文 献

- 1) Fetterman DM : Foundations of Empowerment Evaluation. Sage, 2001.
- 2) Fetterman DM, Wandersman A (ed.) : Empowerment Evaluation Principle in Practice. New York, The Guilford Press, 2004.
- 3) 源由里子：エンパワメント評価の特徴と適用の可能性～Fetterman による「エンパワメント評価」の理論を中心に～. 日本評価研究 3 (2) : 70-86, 2003.
- 4) Fetterman DM : 「エンパワメント」はどのように評価

- するのか？—他者と自らへの支援とその効果—。講演会記録（通訳：伊藤高章）。桃山学院大学人権年報 31：52-73, 2005.
- 5) 小西加保留, 田中千枝子, 菱川愛, 伊賀陽子, 生島嗣：エンパワメントのプログラム開発に関する調査研究。厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業平成 15 年度研究報告書「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究（研究代表者：木村哲）。pp. 249-251, 2003.
- 6) 小西加保留, 大和三重, 村社卓, 小原真知子, 西村昌記：「介護支援専門員の研修のあり方についての検討」報告書。平成 21 年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究 A）「ソーシャルワークの特性に関する実証的研究—ケアマネジメントとの関連をもとに—」（研究代表者：白澤政和）。2009.
- 7) 長尾真文：実用重視評価の理論と課題。日本評価研究 3 (2)：57-69, 2003.

Evaluation of a Citizen Led Community Enlightenment Campaign

Kahoru KONISHI¹⁾, Kyoko SETO²⁾, Masaaki TAKATA²⁾ and Hideaki KAJIWARA³⁾

¹⁾ Department of Social Work, School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University,

²⁾ Social Welfare Service Corporation “Tsubaki-kai”,

³⁾ Yodogawa Ward Office, Public Health Welfare

Objective : An HIV/AIDS enlightenment campaign has been done in various forms, but very few of those were conducted by a citizen's group or a professional organization not specialized in HIV/AIDS. This study evaluates a community enlightenment campaign in Kadoma City, Osaka, led by Community Life Support Center “Ann” (a social welfare service corporation “Tsubaki-kai”), a citizen's group for child protection, and NPO “Niji”, using Empowerment Evaluation (EE) developed by D. Fetterman.

Methods : EE is one of participatory evaluation methods, which emphasizes dialogs among participants and aims to empower participants as well as to promote social change. Its process is comprised of three steps, that is defining mission, taking stock, and planning for the future. This study clarifies the process of EE of this campaign which generated two goals, organizing a community event on HIV issues conducted by local high school students and creating an activity on sexuality and developmental tasks of the adolescence.

Results : This paper analyzes the 6-year process from the following seven viewpoints. 1. Introduction of EE ; 2. Constitution of participating organizations ; 3. Meaning of the process and outcome for each group ; 4. Difficulties faced by the facilitator during the process ; 5. Analysis according to 10 principles of EE ; 6. Difficulties inherent in HIV/AIDS campaign ; and 7. The method of EE. A certain outcome was clarified, but also many problems were also indicated. It's expected that refinement of EE method lead to social contribution by piling up a case.

Key words : citizen led campaign, community enlightenment, empowerment evaluation